

# 中世スペイン語における“fue＋自動詞の過去分詞”の時制について

江 藤 一 郎

## 序

中世スペイン語において、場所や状態の変化を示す自動詞の完了形を作る助動詞は、ser である事は、よく知られている<sup>1)</sup>。当時の直説法の完了時制の一部を、他動詞 (fazer) と自動詞 (ir) を例として現代スペイン語 (hacer) と比べてみると、次のような形態になる。3人称単数形を代表形とする。

	hacer	fazer	ir
現在完了 (Pretérito perfecto) <sup>2)</sup> compuesto	ha hecho	a fecho	es ido
過去完了 (Pretérito pluscuamperfecto)	había hecho	{ avie fecho fiziera	{ era ido fuera
直前過去完了 (Pretérito anterior)	hubo hecho	ovo fecho	fue ido

自動詞の完了形に、“aver” が助動詞として使われることもあった<sup>3)</sup>。

中世スペイン語の時制体系は、現代のように整理されたものでなく、“Cantar de Mio Cid” では、他動詞の直前過去完了形は、直前過去完了だけでなく、完了過去 (Pretérito perfecto simple) としても機能していたことが指摘されている<sup>4)</sup>。即ち現代スペイン語では、文語として扱われているが、直前過去完了形は、時の接続詞 “cuando”, “así que”, “luego que”, “después que” などに続いて使われ、主節の動詞の表わす行為より直前に、ある行為が完了していることを表わすのだが、中世スペイン語には、そのような時の従属節の中でしか使われないという制限がなく、完

了過去としても使われていたのである。

他動詞の直前過去完了形“ovo+過去分詞”に対応する自動詞の直前過去完了形“fue+過去分詞”は、“Cantar de Mio Cid”においては、完了過去としてしか機能していない。Hanssen も中世スペイン語では、“fue+自動詞の過去分詞”が完了過去の機能をもつことを述べている<sup>5)</sup>。しかし“El Conde Lucanor”においては、この形態は、時の従属節の中でしか使われないという制限をうけ、直前過去完了として機能していると思われる。この論文では、“fue+自動詞の過去分詞”が、どんな時制であったか、いつ頃直前過去完了として機能したかを、“Cantar de Mio Cid” (1140 年頃の作)、“Libro de Apolonio” (1240 年頃の作)、“El Conde Lucanor” (1335 年作)、“Lazarillo de Tormes” (1554 年出版) の 4 作品をテキストにしてみたい<sup>6)</sup>。

“fue+自動詞の過去分詞”の時制を決定するには、形態的に対応する“ovo+他動詞の過去分詞”がどのような時制であったかをみて、そして次に“fue+自動詞の過去分詞”の時制を考えるのが説得力のある方法と思うので、作品ごとに“ovo+過去分詞”と“fue+過去分詞”の時制をみてゆき、最後にその関係をまとめてみたい。

## 1. “Cantar de Mio Cid”

### A.

“ovo+他動詞の過去分詞”の形態は、時を表わす従属接続詞“quando”で導かれる従属節の中で使われ、なおかつ主節に完了過去が使われていると、直前過去完了として機能する。

Mas quando esto ovo acabado, penssaron luego d'al. (3252)

しかしこの事を終えると、すぐ他の事を考えた。

上のような時の従属節でない所で使われる“ovo+他動詞の過去分詞”の形態は、完了過去の機能をもつ。

Al rey Yúcef tres colpes le ovo dados,  
saliósle de sol espada, ca muchol andido el cavallo, (1725-1726)

ユセフ王に三打撃加えた。剣のもとからくぐりぬけた。馬が懸命に走ったので。

“ovo dados” は、ここでは独立的に使われているので、時制は次の行の “salió” と同じ完了過去として機能しているはずである<sup>7)</sup>。“á-o” の asonancia の都合上この形態が使われていると思う。Bolaño e Isla の現代語訳<sup>8)</sup>では、この形態は “dio” になっている。

Al rey Yusuf le *dio* tres golpes,  
pero se le puso fuera del alcance de la espada, pues su caballo  
era corredor, (1725-1726)

## B.

“ovo+他動詞の過去分詞” に対応する形態 “fue+自動詞の過去分詞” は、時を表わす従属接続詞に導かれた従属節の中で使われておらず、完了過去としてか機能していない。“Cantar de Mio Cid” では、この形態の時制を判断するのに都合の良い例がある。

- (1) Fabló mio Çid Roy Díaz, el que en buen ora *fue nado*: (613)  
めでたき時に生まれし者、わがシード、ルイ・ディーアスは話した。
- (2) Mio Çid Roy Díaz, el que en buena *nasco*,  
al rey Fáriz tres colpes le avié dado; (759-760)  
めでたき時に生まれし者、わがシード、ルイ・ディーアスは、ファリス王に三打撃与えた。
- (3) “Dezid a Roy Díaz, el que en buen ora *naçió*,  
quel iré a vistas do aguisado fore; (1910-1911)  
めでたき時に生まれし者、ルイ・ディーアスに都合の良い時に彼を訪ねてゆくと伝えてくれ。

(1)の “fue nado” は、ser の完了過去3人称単数形 “fue”+naçer の

過去分詞の強変化形, (2)の “nasco” は, *naçer* の完了過去の強変化形, (3)の “naçió” は, *naçer* の完了過去の弱変化形である。いずれも「めでたき時に生まれし者」という常套句の中で使われているので, (1)の “fue nado” は, 完了過去として, “nasco”, “naçió” と同じように機能しているのがわかる。3つの形態は, *naçer* の完了過去の異形態で, 文体上の違いがあるかもしれないが, 環境によって形態の制約をうけないので, 自由変異をなしている。次の3つの例も同じような意味の常套句の中で使われているが, 動詞は2人称複数形である。

- (1) *ya Campeador, en buen ora fostes naçido!* (71)  
 おお, 闘将よ, めでたき時に生まれし者よ。
- (2) “*Merçed, Campeador, en ora buena fostes nado!* (266)  
 闘将よ, めでたき時に生まれし者よ, 感謝致します。
- (3) “*Omillámosnos, Çid, en buena nasquiestes vos!* (2053)  
 ひれふします, シードよ, めでたき時に生まれし者よ。

(1)の “fostes naçido” は, *ser* の完了過去の2人称複数形 *fostes*+*naçer* の過去分詞の弱変化形 *naçido*, (2)の “fostes nado” は, *fostes*+*naçer* の過去分詞の強変化形 *nado*, (3)の “nasquiestes” は, *naçer* の完了過去, 強変化形2人称複数形である。現代スペイン語の “nacisteis” にあたる。この例の常套句「めでたき者に生まれし者よ」は, 直訳すれば, 「そなたはめでたき時に生まれた。」であるが, 3つの形態は同じような形式の同じ意味を表わす常套句の中に使われているので, (1)と(2)の “fostes+*naçer* の過去分詞” は, (3)の “nasquiestes” と同じ時制, 即ち完了過去と判断できる。3つの形態は, やはり自由変異をなす *naçer* の完了過去の異形態である。

上の常套句のほかでは, “fue+自動詞の過去分詞” の形態は独立した文で一度だけ使われている。

“*El Campeador por las parias fo entrado,*

*grandes averes priso e mucho sobejanos, (109-110)*

闘将は、貢物を求めて入城した。大量の大変素晴らしい富を手にいれた。

“fo entrado”の“fo”は“fue”の異形態である。この“fo entrado”も時の従属節の中で使われておらず、110行目の“priso”と同じ完了過去として機能していると思われる<sup>9)</sup>。すると“entrar”の完了過去“entró”の異形態という事になるが、この形態も使われている。

*assí entró sobre Bavioca, el espada en la mano. (1745)*

このように、手に剣をもって、バピエーカに乗って入城した。

## 2. “Libro de Apolonio”

### A.

“ovo+他動詞の過去分詞”の形態は、“Cantar de Mio Cid”と同様、2つの機能をもっている<sup>10)</sup>。時を表わす従属節で使われ、直前過去完了を示している例は、次のものである。

*Quando houo bien dicho e ouo bien deportado,*

*Dixo el rey: “Amiga, bien so de ti pagado. (496, a-b)*

彼女が大いに歌い、楽しんだ時に、王は言った。「そなたが大いに満足した。」と。

時の従属節に関係しない所では、完了過去として機能する。

*“Si esta moça fuese de carrera tollida,*

*Con estos sus adobos que la fazen vellida*

*Casaria mi fija, la que houe parida.” (370, b-d)*

もしこの女が殺されれば、彼女を美しくしているこの装身具と共に、私が生んだ娘を結婚させるのだが。

“houe parida”は、完了過去の“pari”の意味で使われている。やはり

“i-a”の *asonancia* の都合上この形態が使われているのであろう。この作品では、“*auer*”はまだ現代の“*tener*”の意味をもっていて、直接目的語の補語として他動詞の過去分詞をとることもあるが<sup>11)</sup>、この例の“*parir*”では意味的におかしくなるので完了過去と、とるのがよいと思う。

## B.

“*fue*+自動詞の過去分詞”は、“*Cantar de Mio Cid*”では、完了過去としての用例しかみられなかったが、この作品では“*ovo*+過去分詞”の用法と同様、直前過去完了として機能していると思われる例がある。

Luego que *fue* Licorides deste mundo *pasada*

Aguiso bien el cuerpo la su buena criada, (364, a-b)

リコリデスがこの世を去るとすぐ、良き少女はその死体を立派に飾った。

“*fue pasada*”という形態は、「～するやいなや」を示す時の接続詞“*luego que*”の後で使われ、主節が完了過去の“*aguiso*”なので、直前過去完了と解される。

“*Cantar de Mio Cid*”では、“*fue*+*nacer*の過去分詞”の形態が時の従属節とは関係せず、完了過去として使われていたが、同じ形態が“*Libro de Apolonio*”でも完了過去として使われている。

“¡Mesquino, dixo, que por mal *fuy nascido*!” (114-d)

「不幸者、なんと私は不幸に生まれたのだ。」と言った。

Dizia: “¡Ay, mesquina, en mal ora *fuy nada*! (530-a)

「ああ、不幸者、なんと悪い時に私は生まれたのでしょうか。」言った。

“*fue nado*”の形態で、時の接続詞“*desque*”に導かれた従属節の中で使われてはいるが、意味的に直前過去完了とみなすより完了過去と取る方が良い例がある。

Dixo ha altas bozes: “Desque yo *fuy nado*

Non vi, segunt mio sseso, cuerpo tan acabado.” (191, c-d)

大きな声で言った。「私が生まれて以来、私の考えによれば、これほど立派な人を見たことがない。」

“fuy nascido”, “fuy nado” の異形態である “naçi” という naçer の完了過去単純形も使われている。

Naçi entre las ondas on naçen los pescados, (491-c)

魚が生まれる波の中で私は生まれた。

naçer 以外にも “fue+自動詞の過去分詞” の形態で, arribar, casar, entrar, llegar 等が完了過去として使われているが, 次に venir の例をみてみよう。

La duenya fue venida sobre gent adobada,

Saluo Antinagora e a toda su mesnada; (485, a-b)

娘は大変美しく着飾ってやってきた。アンティナゴラとその一行皆に挨拶した。

時を表わす従属節の中で使われていても, 主節の動詞が不完了過去 (Pretérito imperfecto) なので, 意味的に直前過去完了と解釈するより, 完了過去ととる方がよい “fue venido” の形態がある。

Quando a XII anyos fue la duenya venida

Sabia todas las artes, era maestra complida; (352, a-b)

娘が 12 才になった時には, あらゆる学芸を修めていて完璧な名人だった。

“fue venido” の異形態で, “vino” という形態も使われている。

La duenya vino luego, non lo quiso tardar, (162-c)

娘はすぐ来た。遅れたくなかった。

上の例でわかるように “fue venido” と “vino” は, *venir* の完了過去形の自由変異をなす異形態である。Carroll Marden はこの事を次のように指摘している<sup>12)</sup>。

When the past participle is used with the perfect of *ser*, the result is, in meaning, a preterit; cf. *fuy nascido* (=‘naci’) 114d, *fuste venido* (=‘viniste’) 88c.

### 3. “El Conde Lucanor”

#### A.

“ovo+他動詞の過去分詞”の形態は, 現代スペイン語のように時を表わす接続詞, “desque”, “luego que”, “después que” 等のあとの従属節にしかあらわれず, もはや完了過去は表わさず直前過去完了のみを表わすようになってきた。接続詞 “de que” と “quando” のあとにくる例をみてみよう。

Et de que esta razón ovo dicha, acomendó el cuerpo et el alma a Dios…… (III, p. 71.)

そしてこの事を言ってから, 体と魂を神に託した。

……et quando ellos ovieron avierto la puerta de lla villa, los tres cavalleros que se tornavan su passo, eran ya quanto alongados; (XV, p. 109.)

町の門をあけた時には, 帰りかけていた3人の騎士達は, もうかなり遠ざかっていた。

現代スペイン語では, 上のような接続詞のあとでは直前過去完了形の代りに, 完了過去や過去完了が用いられるが, この作品では過去完了形はほとんど使われておらず, 完了過去形が直前過去完了形よりも多く用いられている。現代スペイン語においては, 「～するやいなや」を意味する接続詞のために, 時の従属節の中の完了過去と直前過去完了の差異はあまり感じられないと Gili Gaya は述べているが<sup>13)</sup>, この作品においてもその時



制の差は感じられない。“desque”と“luego que”のあとに表われる直前過去完了形と完了過去形の例を一つずつみてみよう。

“desque”

Et desde esto *ovo dicho*, llamó al deán: (XI, p. 95.)

そしてこの事を言ってから、司祭長を呼んだ。

Desde el negro eso *dixo*, otro que lo oyó *dixo* esso mismo, .....  
(XXXII, p. 182.)

黒人がその事を言うと、それを聞いていた他の者が同じ事を言った。

“luego que”

Et luego que esto *ovo dicho*, cavalgó et fuesse en buena ventura.  
(XXV, p. 147.)

この事を言うとき、馬に乗り幸せ一杯で出かけて行った。

Et luego que eso *vio*, mandol enforcar. (XLV, p. 226.)

そしてこの事をみてとるとすぐ、彼を縛り首にするよう命じた。

次の“después que”の例では、自動詞ではあるが“aver”を完了形の助動詞とする *comer* の直前過去完了形と自動詞の *entrar* の完了過去形が同じ従属節に使われ、あまり時制の差がない事がわかる。

Et después que Saladín *ovo comido* et entró en su cámara, envió por la buena dueña. (L, p. 251.)

サラディンは食べて、自分の部屋に入った後、良き婦人を迎えにやった。

B.

“fue+自動詞の過去分詞”は、“ovo+他動詞の過去分詞”と同じように、時を表わす接続詞に導かれる従属節の中でしか使われておらず、例外的に2例は意味的に直前過去完了と取るより完了過去と解釈した方がよい

が、ほとんどは直前過去完了の機能を果たしていると思われる。

“caer” の例

……et desde las perdizes  *fueron caydas*  en la ret, aquel que las caçava llegó a la ret en que yazían las perdizes; (XIII, p. 103.)

そしてしゃこが罾に落ちると、捕えようとした者がしゃこがいる罾にやってきた。

“fueron caydas” は、「～してから」を意味する “desde” のあとに使われ、また主節の動詞 “llegó” が完了過去であるので、直前過去完了と判断できる。

“passar” の例

Et desde estas cosas  *fueron passadas* , endereçó Saladín para yrse para su tierra quanto más ayna pudo. Et desde llegó a ssu tierra, ovieron las gentes con l' muy grand plazer et fizieron muy grant alegría por la su venida.

Et después que aquellas alegrías  *fueron passadas* , fuesse Saladín para casa de aquella buena dueña quel fiziera aquella pregunta. (L, pp. 250-251.)

そしてこれらの事が過ぎ去ると、できるだけ早く帰るために、サラディンは故国に向かった。そして故国に着くと人々は大変喜んで、彼の帰国を祝った。祝宴が終った後で、サラディンはかの質問をした婦人の家へ行った。

“ir” の例<sup>14)</sup>

Et luego que el emperador  *fue ydo* , començó ella a ensañarse et a enbraveçer, et començó a dezir: (XXVII, p. 159.)

そして皇帝が行ってしまうとすぐ、彼女は憤り、荒れ狂い、言い始めた。

Et desde el cavallero  *fue ydo*  en su serviçio, cuydando que

yba muy bien andante et muy amigo de su señor, fuesse Saladín para su casa. (L, p. 246.)

そして騎士が大変幸せで、主君の大親友であると思いながら、務めを果たしに行ってしまったから、サラディンは彼の家に行った。

自動詞でも時の接続詞のあとでは、直前過去完了形よりも完了過去形が多く使われている。

Et desde que fue en su casa con las gentes, començó a dezir maravillas de cuánto bueno et cuánto maravilloso era aquel paño, …… (XXXII, p. 180)

そして人々と一緒に宮廷に戻ってくると、その服がどんなに良いものか、どんなに素晴らしいものかと驚嘆して話し始めた。

次の2つの例は時の従属節の中で使われているが、意味的に直前過去完了と取るより、完了過去と解釈した方がよい直前過去完了形である。

……que desde que *fuy nascido* fasta agora, que siempre me crié et visque en muy grandes guerras, …… (III, p. 68.)

生まれてから今まで、私はいつも大変大きな戦争の中で育ち、生活した。

“ser の完了過去+nascido” は、“Cantar de Mio Cid” でも“Libro de Apolonio” でも、完了過去として使われていた。

Et por ende, desde el rey *fue caydo* en esta dubda et sospecha, estava con grant reçelo, pero non se quiso mover en ninguna cosa contra aquel su privado, fasta que desto sopiese alguna verdat. (I, p. 56.)

そしてそれ故、王はこの疑惑に落ちいってから、非常に心配していたが、この事についてなんらかの真実を知るまで、あの側近者に対してなにもする気はなかった。

“fue cayódo” は, “desque” のあとで使われているが, 主節の動詞 “estava” が不完了過去なので, 直前過去完了と取るより完了過去として解釈する方が自然である。

#### 4. “Lazarillo de Tormes”

##### A.

“ovo+他動詞の過去分詞”の形態は, 3例みられる。2例は時の接続詞 “desque”, “después que” のあとで使われており, もう1例は, “ya que” のあとだが, これも理由を含む「時の接続詞」と考えられる。いずれも主節は完了過去なので “ovo+過去分詞” は直前過去完了とうけとれる。

……y sacó un jarro desbocado y no muy nuevo, y, desde *hubo bebido*<sup>15)</sup>, convidóme con él. (III, p. 105.)

口の欠けた, あんまり新しくもない水差しを持ち出して, 飲み終るが早いか, わたくしに水差しを差し出して飲むようにすすめました。

(会田 由訳<sup>16)</sup>, p. 63.)

##### B.

“fue+自動詞の過去分詞”は, 3例みられる。2例は “desque” のあとで使われ, 直前過去完了を表わしていると思うが, もう1例は “hasta que” のあとなので, 完了過去と解釈しないと, おかしくなる。

Y desde *fue bien vuelto* en su acuerdo, echóse a los pies del señor comissario y, …… (V, p. 137.)

そしてすっかり正気に復したかと思うと, いきなり彼は遣外僧猓下の足もとに身を投げだして, ……

(会田 由訳, p. 105.)

“desque” のあとに, 正気に戻る (*volver en su acuerdo*) という熟語が “fue vuelto” という形で使われ, 主節が完了過去 “echóse” なので, “fue vuelto” は直前過去完了である。

Desde *fuimos entrados*, quita de sobre sí su capa, y, preguntando si tenía las manos limpias, la sacudimos y doblamos y, muy limpiamente, soplando un poyo que allí estaba, la puso en él. (III, p. 103.)

われわれが家へはいるやいなや、主人は着ていた合羽を脱いで、わたくしに手はきれいだねと訊ねたうえで、わたくしたちは二人がかりで、合羽のほこりをはらい、そこへ置いてあった腰かけ台を、ひどく注意ぶかくふうふう吹いておいて、それから合羽をその上に置いたものでございます。(会田 由訳, pp. 59-60.)

“fuimos entrados”は、“desde”のあとに使われているが、主節の動詞は現在形の“quita”である。しかしこれは次の“puso”でわかるように、本来ならば“quitó”という完了過去の役割をする歴史的現在で、“Lazarillo de Tormes”では、時を表わす従属節のあとの主節でしばしば使われている。Keniston も、この“fuimos entrados”を直前過去完了と認めている<sup>17)</sup>。

“hasta que”の後の例

Entonces se entró en la iglesia mayor, y yo tras él, y muy devotamente le vi oír missa y los otros oficios divinos, hasta que todo *fue acabado* y la gente *ida*. (III, p. 102.)

その時、彼が大寺院にはいてまいったので、わたくしもその後に従いました。見ていると、実に熱心に弥撒やそのほかの勤行を、何もかも終了して、信者たちがみんな行ってしまうまで、拝聴していたのでございます。(会田 由訳, p. 58.)

“la gente ida”の所は、“fue”が省略されたもので、完全な文は“la gente fue ida”である。“acabar”は自動詞でも *ser* を完了形の助動詞としてとらないので、ここでは再帰動詞として使われ、再帰動詞の完了形にも *ser* が助動詞として使われていたので、“fue acabado”になる。これは再帰動詞の完了過去形である。“fue ida”も意味的に、“ir”の再帰形の完了過去形ある。2つの“fue+過去分詞”は“hasta que”のあと

なので、完了過去の“se acabó”と“se fue”の異形態と考えられる。

### ま と め

他動詞の完了時制には、“aver”を助動詞に用い、場所や状態の変化を示す自動詞の完了時制には、“ser”を主として用いるのが中世スペイン語の習わしだったので、“fue+自動詞の過去分詞”の時制を決定するには、対応する“ovo+他動詞の過去分詞”が規準になる事が予想されたが、4つのテキストをみる限り、2つの形態の機能は完全には一致していない。“ovo+過去分詞”の現代スペイン語形は、“hubo+過去分詞”という直前過去完了形なので、現代の時制体系から考えると、“Cantar de Mio Cid”と“Libro de Apolonio”で完了過去と直前過去完了の2つの機能を持っていたとしても、“El Conde Lucanor”と“Lazarillo de Tormes”では、直前過去完了の機能しかもっていないのは納得がゆく。なぜ2つの機能をもっていたのかは、“aver+過去分詞+直接目的語”の形が、現代の“tener”と同じ機能をもっていて、“ovo+過去分詞”が行為の結果の状態を保持する完了過去も示す可能性があったからと推測できるが、研究の余地が十分ある。

“fue+自動詞の過去分詞”は、“Cantar de Mio Cid”では完了過去の例しかなく、また全部で5例しか使われていない。“Libro de Apolonio”になると、この形態はよく使われていて、直前過去完了と思える例もみつける。“El Conde Lucanor”になると、“ovo+過去分詞”が直前過去完了しか表わさなくなったのに対応して、すべての“fue+自動詞の過去分詞”は、時の接続詞に導かれた従属節にしか使われず、ほとんどが直前過去完了と解釈できる。完了過去が直前過去完了の代りによく使われているが、“Lazarillo de Tormes”でも、そのせいか、“ovo+過去分詞”の形態は3例しかなく、“fue+過去分詞”で直前過去完了を表わしているのは、2例にすぎない。

今まで述べてきたことを図式化してみると、次の頁のようになる。“p.p.”は過去分詞“Participio Pasado”の省略記号あるで。

これだけの資料からみると、現代スペイン語の直前過去完了“ovo+過去分詞”は、14世紀頃その役割を得たように思われる。今までの歴史文法書であまりふれられていない問題だけに、独断があるかもしれないが、

		機 能	
		完 了 過 去	直 前 過 去 完 了
Mio Cid (1140 年頃作)	ovo+p.p. fue+p.p.	○ △ 5 例	○ ×
Apolonio (1240 年頃作)	ovo+p.p. fue+p.p.	○ ○	○ ○
Lucanor (1335 年作)	ovo+p.p. fue+p.p.	×	○ ○
Lazarillo (1554 年出版)	ovo+p.p. fue+p.p.	×	△ 3 例 △ 2 例

“fue+過去分詞”が、直前過去完了として機能した事を実証できたと信じる。  
(1979 年 9 月 4 日)<sup>18)</sup>

〔注〕

- 1) Hanssen, Federico: *Gramática histórica de la lengua castellana*, Ediciones Hispanoamericanas, París, 1960, pp. 230-233.  
再帰動詞の完了形にも“ser”が用いられるが、再帰形にのみ用いられる動詞や他動詞の再帰形の完了形と、自動詞の再帰形では、時制が“El Conde Lucanor”では違うと思われるので、この論文では自動詞とその再帰形のみ扱うが、ser を使った完了形では再帰代名詞をつけないので、形は同じになり、その区別はつけにくいので、必要な場合以外は再帰形にはふれない。
- 2) この論文では、時制のスペイン語名称は、次の本の名称を採用した。  
Real Academia Española: *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid, 1973.
- 3) Hanssen, *op. cit.*, p. 231.
- 4) Menéndez Pidal, Ramón: *Cantar de Mio Cid*, obras completas de R. Menéndez Pidal, tomo III, volumen I, crítica del texto-gramática, Espasa-Calpe, Madrid, 1964, p. 356.
- 5) Hanssen, *op. cit.*, p. 235.
- 6) テキストには、以下の本を使った。  
*Cantar de Mio Cid*, Obras completas de R. Menéndez Pidal, tomo V, volumen III, (texto del cantar y adiciones), 4ª edición, Espasa-Calpe, Madrid, 1969.  
*Libro de Apolonio*, an Old Spanish poem edited by C. Carroll Marden, Part I, Text and introduction, (Elliott Monographs, 1917, corrected



- reissue 1937), Kraus Reprint Corporation, New York, 1965.
- El Conde Lucanor o Libro de los Enxiemplos del Conde Lucanor et de Patronio, Don Juan Manuel: edición, introducción y notas de José Manuel Blecua; Castalia, Madrid, 1917, (Clásicos Castalia, 2ª ed.)
- La vida de Lazarillo de Tormes, y de sus fortunas y adversidades, edición crítica, prólogo y notas de José Caso González; Madrid, 1967, (Real Academia Española, Anejo XVII).
- 7) Hanssen, *op. cit.*, p. 234.
  - 8) Poema de Mio Cid, versión antigua con prólogo y versión moderna de Amancio Bolaño e Isla, Porrúa, México, 1974, (“Sepan Cuantos……”, Num. 85.)
  - 9) Ford, J. D. M.: *Old Spanish readings*, Gordian Press, Inc., New York, 1967, p. 123. Hanssen, *op. cit.*, p. 235.
  - 10) Libro de Apolonio, estudios, ediciones, concordancias de Manuel Alvar, (I, estudios), Fundación Juan March y Editorial Castalia, Valencia, 1976, p. 419.
  - 11) 次の例を参照,  
Seya vuestro maestro, auet lo atorgado; (193-b)  
お前の先生にしないで、彼を与えられたものとしなさい。
  - 12) Libro de Apolonio, an Old Spanish poem edited by C. Carroll Marden, Part II, Grammar, notes, and vocabulary, (Elliott Monographs, 1922), Kraus Reprint Corporation, New York, 1965, p. 18.
  - 13) Gili Gaya, Samuel: *Curso Superior de Sintaxis Española*, Biblograf, Barcelona, 1972, pp. 162-163.
  - 14) 次の2つの例は, “ir” の再帰形 “irse” の直前過去完了形とも取れる。
  - 15) “beber” は自動詞であるが, 完了形の助動詞に haber をとるので, この項 “A” にいれた。
  - 16) “Lazarillo de Tormes” の日本語訳は, 次の本を用いた。「ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯」会田 由訳, 岩波文庫 (2660), 第五刷改訳, 岩波書店, 東京, 昭 47。
  - 17) Keniston, Hayward: *The Syntax of Castilian Prose. The sixteenth century*, The University of Chicago Press, Chicago. Illinois, 1937, p. 446.
  - 18) 本稿は第 30 回東京スペイン語学研究会 (1978 年 7 月 22 日) において, 口述発表したものを, まとめたものである。